



月刊

2018

2
月号

みんぱく

特集

熊こそが

原点

木彫家 藤戸竹喜の創作の軌跡

「アイヌ工芸品展」のあらたな時代 齋藤玲子

〈座談会〉

アイヌとして 熊彫りとして

藤戸竹喜・藤戸茂子・五十嵐聡美・岡田恵介・佐藤弥生・齋藤玲子

JR 札幌駅のエカシ像 本田優子



アイヌ文化のある幸せ

おおにし ままゆき
大西 雅之

プロフィール
1955年北海道生まれ。鶴雅ホールディングス株式会社代表取締役社長、NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構理事長、北海道の自然と一体となった温泉旅館を展開、また自然、アイヌとともに生きる阿寒の町づくりに取り組む。アイヌ政策推進会議委員として、アイヌ文化の振興、伝統知の普及にも尽力している。

北海道には歴史がない、文化がないと言われてきた。かつては何となくそれに納得もしてきた。転機は木彫刻家の故瀧口政満先生との出会いだった。先生はアイヌ民族ではないが、奥様がアイヌ。五〇年近く阿寒湖畔の「アイヌコタン」に住まわれた。「木の声に耳を傾ける」なから生まれた、時にやさしく、時に凛々しい作品の虜になった。私にとつてのアイヌ文化への入り口は木彫刻からだった。

幼少時代から、学校などでいつもアイヌ民族がそばにいた。ことが当たり前で、特別な意識は持たなかった。アイヌの生き方や歴史に関心が深まったのはコタンのエカシ（長老）から様々な教えを受けてからだ。特に衝撃的だったのは、「イランカラプテ」という挨拶言葉。「こんにちは」を意味し、もともとは「あなたの心にそつと触れさせて下さい」という温かさと謙譲にあふれた本当に素晴らしい言葉であり、自然と共生し平和に暮らしてきたアイヌの生き方を象徴していると思う。二〇一三年から北海道のおもてなしの合言葉にしようという道を中心に、「イランカラプテ」キャンペーンが始まった。

アイヌ民族の教えに「人間は自然の一部」「自然の恵みはカムイ（神）が与えて下さるもの」とある。東日本大震災の直後、エカシと呼ばれた。「この度の大災害は明らかに人災だ。アイヌはカムイを敬つ

て生きているが、その敬いの八割は畏れなのだ。このまま人間が畏れを知らなければ、もつと大きな災害に見舞われる」と教えられ、私は重い言葉として受け取った。今までの自分達の生き方に対する投げかけの言葉でもあった。「北の大地で先住民族の英知に触れ、もう一度人生を見つめ直してみませんか」ということを、北海道をして阿寒からのメッセージにしたいと思う。

阿寒には日本最大の「アイヌコタン」がある。大自然、湖、マリモ、タンチョウもいるこのリゾート地の中にコタンがあり、滞在しながらアイヌ文化に触れてもらえるのは阿寒湖温泉の特徴である。釧路市は長崎市・金沢市と共に国から観光立国シヨークースに認定された。そのテーマは、「世界トップクラスの自然に抱かれ、自然との共生文化を体感するカムイの休日」を提供すること。その先に欧米豪を中心とするアドベンチャーツーリズムの聖地を目指したい。三大要素は、「自然」「アクティビティ」そして「異文化体験」と言われる。ナショナルジオグラフィック・フェローが阿寒湖でのアイヌアーティストの取材中に何度も口にされていた言葉「Fantastic!」。まさに阿寒は三大要素を兼ね備えていると自負する。これからも、アイヌ民族としっかりと手を携えてこの夢に向かっていきたい。

月刊
みんなぱく

2月号目次

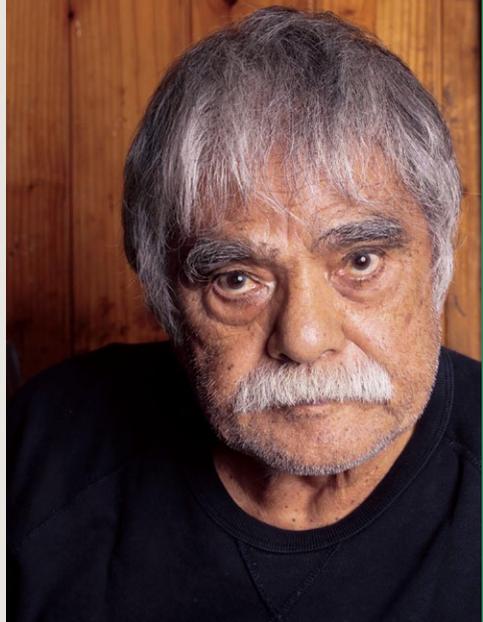
1	エッセイ 千字文 アイヌ文化のある幸せ 大西 雅之	12	みんなぱく Information
	特集 熊こそが原点 —— 木彫家 藤戸竹喜の創作の軌跡	14	想像界の生物相 ベニンの魚足王 戸田 美佳子
2	「アイヌ工芸展」のあらたな時代 齋藤 玲子	16	新世紀ミュージアム 中国国家博物館 飯田 卓
3	座談会 アイヌとして 熊彫りとして 藤戸 竹喜、藤戸 茂子、五十嵐 聡美、 岡田 恵介、佐藤 弥生、齋藤 玲子	18	手芸考 「手芸」誕生 —— バングラデシュの刺繍布カンタから 五十嵐 理奈
9	JR 札幌駅のエカシ像 本田 優子	20	ながなんぢや ひり出せ糞！ 星 泉
10	〇〇してみました世界のフィールド 大阪の都市景観の変遷を探る 内田 吉哉	21	次号予告・編集後記

熊こそが原点

木彫家 藤戸竹喜の創作の軌跡

開館四〇周年記念企画展「アイヌ工芸品展」現れよ。森羅の生命― 木彫家 藤戸竹喜の世界― 開催にともない、藤戸竹喜さんをお話をお話をうかがいました。藤戸さんご夫妻と企画・運営に携わる方々のことばから、藤戸作品の魅力、そして作品の背景にあるアイヌの先人たちのかわりに迫ります。

会期 三月一三日「火」まで
会場 本館企画展示場



藤戸竹喜

一九三四年、北海道美幌町生まれ。少年時代を旭川で過ごす。木彫り熊の名手であった父・竹夫のもとで二歳のころから熊彫りをはじめ、職人として、五歳から阿寒湖畔の吉田屋（みやげ物屋）などで腕をみかく。一九六四年、同地に民芸品店「熊の家」を構えて独立。「樹霊観音像」制作を機に活躍の場を広げる。おもな展覧会「AINU: Spirit of a Northern People」（一九九九年、米国ワシントン協会 国立自然史博物館）、みんぱくでも開催されたアイヌからのメッセージものづくりと心（二〇〇三年、徳島県立博物館、旭川市博物館も巡回）など。受賞歴に北海道文化賞（二〇一五年）、文化庁地域文化功労者表彰（二〇一六年）など。

撮影：露口啓二



「四熊（見ず、聞かず、言わず、せず）」2016年 作家蔵

「アイヌ工芸品展」のあらたな時代

齋藤 玲子

民博 学術資源研究開発センター

藤戸竹喜氏の作品をみんぱくの企画展として展示できることに、深い感慨を覚える。筆者が初めて仕事で藤戸氏の店「熊の家」を訪れたのは、二五年前のこと。一九九三年は国連が定めた「国際先住民年」で、筆者が勤務していた北海道立北方民族博物館では、特別展「北方諸民族と現代の民族芸術」を企画、アイヌをはじめ北米や北欧の先住民の芸術に焦点をあてることとなった。同館は古いアイヌ民具しか所蔵していなかったため、現存作家たちの作品を調査し、購入するために阿寒湖畔や平取町二風谷などの民芸店を回ったのだ。

初めてじっくり見た藤戸氏の彫った熊は、今まで見たどの「木彫り熊」とも違った。こんな表情の、こんな細かい毛並みの、生き生きした熊があるのか、と感動した。しかし、作品を博物館で買うことはできなかった。予算的にも厳しかったが、藤戸氏の作品がアイヌ文化としてどう位置付けられるのか、駆け出しの学芸員だったわたしには説明できなかったのだ。結局、伝統的な民具を複製・復元している方たちの作品を展示しただけだった。

その後、二〇〇〇年に北海道アイヌ協会旭川支部長（当時）の川上哲さんと「木彫り『熊』源流展」を企画、藤戸さんから作品数点を借用し、展示した。一〇年前には、（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構（アイヌ文化財団）の「アイヌからのメッセージ 二〇〇七」の企画委員として、藤戸さんにインタビューをし、生い立ちから近年の作品に至るまでの話を聞かせていただいた。

藤戸さんが歩んできた人生とその作品は、アイヌの先人たちの関係抜きには語れない、と今ははつきり言える。そして、設立二〇周年を迎えたアイヌ文化財団は「アイヌ工芸品展」として初めて、一人の作家の創作活動を追った展示をおこなった。時代は変わった、とつくづく思うのである。

一座談会

アイヌとして 熊彫りとして

藤戸 竹喜

藤戸 茂子

五十嵐 聡美

北海道立近代美術館
平成二九年度アイヌ工芸品展企画委員会委員長

岡田 恵介

公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

佐藤 弥生

札幌芸術の森美術館

平成二九年度アイヌ工芸品展企画委員

齋藤 玲子

民博 学術資源研究開発センター
平成二九年度アイヌ工芸品展企画委員

あらたな展覧会へ

齋藤 今回の展覧会にあたり、わたしたちは何度も阿寒にある藤戸さんのアトリエやお店にお邪魔して、出品作を選び、生い立ちから現在に至るまでのさまざまなお話を聞かせていただきました。奥様の茂子さんにもいろいろとご協力をいただき、一緒にお話をうかがいました。これまでに何度もねした話題が出てくると思いますが、読者のために、おつきあいください。まずは、本展を企画した経緯からお聞きしていきたいと思えます。

岡田 この展覧会は、アイヌ文化財団（公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構）が二〇年前から毎年おこなってきた「アイヌ工芸品展」です。平成二九年度は道内会場が札幌芸術の森美術館、そして、道外会場がみんぱくです。

わたしが竹喜さんにはじめてお会いしたのは、アイヌ文化財団に勤める前、アイヌ民族博物館（白老町）に勤務していたときです。野本正博館長と一緒に訪ねて、「いつか作品展をしたいですね」という話をした記憶があります。

藤戸夫妻 そうでした。覚えています。岡田 縁があったのか、今回は運営を担当することになりました。

齋藤 これまでのアイヌ工芸品展は、古い伝統的な工芸品を中心とした展示が多かったですよね。そのなかで、現代の作品を集めた「アイヌからのメッセージ」展（平成一五年度、平成一九年度）、そして



藤戸さんと奥様の茂子さん

「AINU ART 風のかたり

べ」展（平成二四年度

を経て、今回は

藤戸竹喜さん

の創作活動を

追った展覧会と

なりました。新

しい試みです。

岡田 そう

ですね。工

芸品展で何を

するか、中長期

的に決めていくな

で、竹喜さんの展覧会をという案が出ました。

五十嵐 北海道立近代美術館での「AINU ART」展を担当したあと、次は「竹喜さんしかない」と考えていました。藤戸さんをアイヌの作家の一人としてではなく、北海道を代表する彫刻家、そして今の日本を代表する木彫の具象作家としてご紹介したい、そんな思いがありました。

佐藤 わたしは「AINU ART」展のときには、まだこの職についていなかったのですが、やはり同展の企画委員だった当館（札幌芸術の森美術館）の佐藤友哉館長から、とても好評だったと聞いています。佐藤館長も、海外ではグループ展のあとに個人の展覧会をして成功を収めている事例が多いので、日本で、北海道でもぜひ藤戸さんの作品展をやりたいと考えてきたそうです。



「シーソー熊」制作年不詳
（株）ほくみん蔵 ※
※印を付した写真は、
撮影：露口啓二

藤戸竹喜 これまでの作品を一堂に集めて見てもらえるということは本当に嬉しい。最高の場所で、最高の皆さんのご協力によって実現したということに感謝しています。

木彫り職人としての第一歩

齋藤 藤戸さんは、「熊が原点」とおっしゃっています。熊を彫りはじめたころのことを改めて教えてください。

藤戸竹喜 本格的にはじめたのは二歳のころだね。親父が熊を彫っている姿を見ていたから、俺もやりたい、作りたいなと思った。学校に行くよりも、彫り物をしているほうが楽しかった。

齋藤 藤戸さんのお父様の竹夫さんは、ご自身のお父様を早くに亡くされ、お祖父さんの川上コヌサさんのもとで熊彫りをされていたんですね。



アトリエでの制作風景

熊は二五〜三〇歳ころまでびっちりやっていた。あの動きというのは、いろいろな意味で繋がるわけ。作品にね。だから熊って、ウタリ（アイヌ語で「同胞」）はカムイ（神、強い力をもつ霊的存在）としているけれど、木彫りでも熊から得るものは多いね。齋藤 北海道のみやげ物として旭川で木彫り熊が作られるようになったのは大正初めころと思われませんが、他にはどのようなものが売られていたのでしょうか。

藤戸竹喜 その前、明治の終わりころは

箸とか衣紋掛けなどのオンコ（樹種：イチイ）細工は女が作っていた。それから男の彫物と

いったら熊やお盆。旭川に来ていた製紙会社や材木屋の人たちに、パスイ（捧酒箸）から熊から、飛ぶように売れていたみたい。パスイもサパンペ（儀礼用の冠。正面に熊の彫刻が付いているものも

多い）もアイヌにとっては何十年、何百年と作り続けてきたものだからね。

そういうものに熊が彫られていたんだよ。だから、熊というのはやりやすかったみたい。明治時代にサパンペから熊が降りてきて、大正時代には木彫り熊になっていた。



「狼と少年の物語」2016年 作家蔵 ※ かつて北海道に生息した蝦夷狼（えぞおおかみ）と、狼に育てられた少年の物語が紡がれます。特筆すべきは、作者自身による文章と、19点の作品によってお話が展開してゆくところ。まるで立体絵巻のように、目の前に情景が広がり、藤戸さんによる物語世界に没入できます。（佐藤弥生）

川上コヌサさんは、旭川の近文（ちかぶみ）で明治末期から視察者や観光客を受け入れた有名な方でした。

藤戸竹喜 そうだね。自宅に宝物館を造って、アイヌの古いものを展示して、木彫や踊りの実演をしたり、工芸品を販売したり。近文で最初に観光を手掛けた人物だ。

熊は、親父だけでなく、親父の先輩たちも彫っていた。コヌサの家の前で、

皆で彫っている写真がある。その先輩たちも前はマタギ（猟師）で、熊撃ちに行つて、熊を連れ帰って養つて、熊と生活していた。だからどんな人でもよく熊を見ていたから、簡単に彫れたわけ。

五十嵐 藤戸さんはお父さんが作品を彫っているとき、そばで見せてもらえたのですか。

藤戸竹喜 見ていたよ。じつと手元を見ていた。教えてくれないから見るしかない。でも黙って見ていただけだと怒られるから、何か彫りながら見ていた。

佐藤 盗み見る（笑）。

藤戸竹喜 自分も真似しながら彫っていた。

藤戸茂子 お父さんが彫った熊が残されているけど、当時としては斬新だね。

五十嵐 お父さん以外に、彫るのを見た人はいますか。

藤戸竹喜 それは一七〜一八歳を過ぎてからだね。一五歳で阿寒湖に来て職人になり、夏だけ三年間働いて、そのあとのこと。親父のばかり見てもつまらないなと思つて、各地の先輩のところをま

齋藤 そのようにして単独で熊が彫られるようになったのかもしれないね。旭川は、早くから木彫品を販売していた先進地で、現代のアイヌの木彫に大きく貢献したと思います。みんぱく会場では、そのあたりも紹介する予定です。

北の動物と先人たち

齋藤 熊が満足いくように彫れるようになってか



「怒り熊」1964年（一財）前田一步園財団蔵 ※ 怒りのエネルギーをみなぎらせる「怒り熊」。12歳から木彫り職人の道に進み、日々、木彫り熊を彫り続けた藤戸さんの職人時代の傑作。大げさと思うかもしれませんが、わたしには、口から火を吐いているように見えます。（五十嵐聡美）

らは、一九七〇年代に熊以外の動物もたくさん作られていますよ。

藤戸竹喜 そうだね。のりにのつていた。まず鹿と決めれば鹿ばかりにかかる。海となれば、ラッコにクジラにシロイルカとそれがずっと続く。次から次へといいのを思いつくわけ。ラッコの次はこれだとか、ザトウクジラならミンククジラ作ろうかとか。並べて自分で楽しむわけ。

佐藤 本展のために作られた「狼と少年の物語」もすごく見応えがありますね。

藤戸竹喜 狼は四〇年くらい前から作っていたけれども、あの作品は自分の思い出なの。狼は本当に作りたかった。北海道のためにね。現実にはたのみに全滅したんだもの。狼は家畜は殺したけれど、人間には危害を加えてないんだよね。そ

ういうのを考えて、狼への思いをずっと温めていた。いつか作る、いつか作るって心に刻んでからはじめた。だからわたしの物語。ただ彫り物としてだけではなく、物語として残したい、まったく知らない子どもたちに

見てもらいたいなと思つた。日本にはむかしからいたんだよとね。



「毛ガニ」1995年 吉田いし氏蔵 ※



「日川善次郎像」1991年 作家蔵 ※
ベストにジャケット、ポケットに手を入れた姿が、オシャレな日川善次郎エカシ。いつも懐中時計をもち、すらっとした体型はモデルのようだ。カムイノミ(神への祈り)の祭司として活躍した晩年の姿を記録でしか見たことがないが、この姿(60歳ごろ)を一目でいいから見たかった。(岡田恵介)

五十嵐 九十年代にはエビとかカニとか作られて、カニなどは裏も全部、実物を見て彫られたんですよ。

藤戸竹喜 毛ガニは食べられるやつを買ってきて、中身を食べた後に全部パーツにして並べて見本にした。

藤戸茂子 いろいろな種類のカニを作ったわよね。タラバもあったし。

藤戸竹喜 あった、あった。全部、売れた。タラバは札幌の歯医者さんが買ってくれた。大きいから、飾ると壁一面を覆う感じ。

佐藤 すごい。見てみたい。

岡田 聞いていたら、絶対に借用に行っていました(笑)。

齋藤 等身大の人物像は一九七〇年ころから作ら

は、結婚して家庭ができてから。余裕がなかったら、いいものは作れない。

佐藤 等身大の人物像は一体を彫るのにどのくらい時間がかかるのですか。

藤戸竹喜 半年かかる。半年でもできないかも知れない。だから作品を三〇、四〇点作る年もあるけれども、二〜三点しかできない年もある。職人時代を除くと、約五〇年。平均で三〇点作ったとして、これまで作った作品を全部合わせるとだいたい二五〇〇点くらいになるかな。

齋藤 ところで藤戸さんはアラスカのケチカンに行つてトーテムポールを作られたりと、他の先住民の工芸も見られています。創作活動にそれらの影響はありますか。

藤戸竹喜 俺は俺の道でやっているから、影響を受けているかどうかはわからない。でもいいものを見るのは好き。フランス行つてもイギリス行つても、まず博物館を見に行く。どんなものでも素晴らしいものを見たいという気持ちはすくなくいいこと。齋藤 先住民の文化に限らないということですね。藤戸竹喜 うん。ヨーロッパの美術館などに行つても、素晴らしい、なるほどと思うものがある。自分が恥ずかしくなることもある。そこで、自分はいいい作品を残さないといけないと思う。手抜きじゃだめだ。手間暇考えないで納得いくまで彫る。でも納得なんじゃないよ、絶対に。一人でコツコツと、自分で好きなものを、ひとつの流れに乗って作る。

藤戸茂子 これでいいと思つても、次に見たら

れています。そのきつかけや、アイヌの先人たちに對する思いについて教えてください。

藤戸竹喜 等身大のきつかけは、前田光子さん(阿寒湖畔一帯の土地の払い下げを受け、林業や観光振興を担っていた前田一歩園の三代目当主)から依頼され、亡くなったご主人の十三回忌のために、一九六八〜六九年にかけて観音立像を彫つたこと。それまで熊しか彫つたことがないんだから、悩みながら彫り上げた。金銭的にも大変だった。この人(妻・茂子さん)と一緒に年だけ、冬を越すお金がなくて。でも、そのあとは人物像の大作の依頼が次々ときて、東海大学総長・松前重義さんも彫つたし、レーニンも、そして八八年には映画「敦煌」の製作記念として、主演の佐藤浩市さんをモデルにした「行徳」像も彫つた。

やっぱいろいろな欠点が目について、今度はそれを乗り越えようと思つてまた作るわけです。だからどんどんよくなる。

それから新しい木材を見たらイメージが湧いて、これが彫りたいという気持ちになるみたいです。

木の中から生命を取り出す

五十嵐 「材を見たらイメージが湧く」ということですが、竹喜さんはどのくらい木を選ばれますか。いい木もあれば悪い木もありますが、どこかよくない部分がある木は彫らないですか、それともいい部分を使つて彫りますか。

藤戸竹喜 例えばオンコでも、枝節えんせつが付いていれば、それも利用する。幹のいいところから作品を彫りはじめて、順繰り順繰り下までいく感じ。どつちかというところ、素直に伸びるスラツとした木は割れやすいから難しい。削っていると振動で割れてしまふ。だから節々があるやつの方が意外と強いわけ。

藤戸茂子 面白くない感じもあるしね。

藤戸竹喜 枝や節を活かして彫る方がいい。真っ直ぐな木で面白みを出そうとすると、無理がかかる。

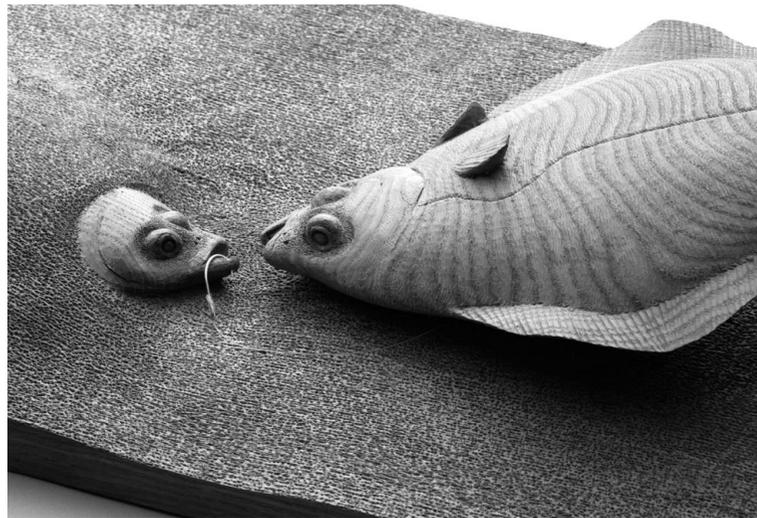
五十嵐 そこが、竹喜さんが職人さんと違うところなんです。木工をやっている方って、彫りすすめて節が出てくると、もうこれはお盆にはできないと捨ててしまふ。で

も竹喜さんはどんな木でもその木の面白さを見つけて作品にする。そういうところはやっぱり職人ではなく芸術家というか、作家だと思つたのです。齋藤 戦後北海道に観光ブームが訪れたころには、シナノキが多く使われていたと思うのですが、他にも、藤戸さんが木彫りをはじめたころはいろいろな材木があったのですか。

藤戸竹喜 あった、あった。職人時代は彫りや



3点すべて「カムイニ」(創作トーテムポール) 2010年 作家蔵



「砂潜りのカレイ」1994年(株)ほくみん蔵 ※

すかったから全部シナノキを使っていた。でも親父はシナノキが大嫌いで、クルミばかり使っていた。だから俺も職人時代にクルミに変えた。それがすごくよかった。狂わないし、木目が綺麗。そして腐りにくい。

岡田 今回の展示のため、春に前田一步園からヤチダモを伐り出して、二頭の熊の立像になるようすを映像に収めました。

藤戸竹喜 ヤチダモははじめて。粘っこくて堅くて、彫るのが大変だった。腰を痛めたわ。

佐藤 木を見て、何を彫るかイメージが湧いてくるとのことですが。

藤戸竹喜 そう。じっと見ていると頭に浮かんできて。それをとり出すように、余計なものを落としていくという感じ。

藤戸茂子 開会式(札幌会場)のあいさつで、佐藤館長がミケランジェロを引き合いに出して、びっくりしちゃった(笑)。

佐藤 西洋彫刻を代表する最高峰ですからね。

五十嵐 石と木の違いがあります。木は生きていますものから、木の方が勝っているのでは。

齋藤 そろそろ最後になりますが、展覧会では、来館者にどのようなところを見てもらいたいですか。

藤戸竹喜 隅々まで見てほしいね。

五十嵐 竹夫さんも常に「見えないところまで彫れ」と言っていたのですよね。

藤戸竹喜 そうそう。外側の見えるところしか彫らない人がほとんどだったけれど、親父は内側の腹の部分といった見えないところにも全部毛を彫っていた。だから俺も見えないところが大事だと思っている。手抜きしたらすぐにわかる。後ろ姿、横から見ても変だったら駄目なんです。

五十嵐 これからも熊を作り続けますか。

藤戸竹喜 そうだね。狼シリーズを作り終えたから、熊に戻ろうか



みんばく企画展示場にて「藤戸タケ像」と

な。工房にちょっとしたクルミがあるから、それを使って彫ろうか。埋もれ木はないからなあ。エンジンでこんな太いやつがある。エンジンをはまた堅い。でも粘りのある堅さ。それがまた、楽しいわけ。狼シリーズは、大阪会場にもって行くの？

齋藤 はい。もちろん全部。ちょっと狭いですけれど。

藤戸竹喜 売れちゃってなければね(笑)。

齋藤 みんばく会場が終わるまで、売らないでください。狼とアイヌの少年の物語は、場面の説明に沿ってすべて展示します。狭いスペースでできるだけ多くの作品を見ていただきたいので、展示替えをする作品もあります(後期は二月二十五日)。よい展覧会になるよう、がんばります。

それでは、本日はお疲れのところ、長時間にわたって、どうもありがとうございました。

10月14日 札幌芸術の森美術館にて

JR札幌駅のエカシ像

ほんだ ゆうこ
本田 優子 札幌大学教授

JR札幌駅の西改札口前コンコース。札幌でもっとも多くの人びとが行き交うスポットに、「ウレシパモシリ北海道 イランカラテ像」は立っている。中央にはクリムセ(弓の舞)を踊るエカシ(長老)の像。いままでもなく藤戸竹喜さんの作品である。



設置セレモニーでのカムイノミ(ウレシパクラブ撮影、2014年)

アイヌ文化のために
設置の経緯はこうだった。二〇一三年、「イランカラテ(こんにちは)」を北海道のおもてなしのことばとすべく、内閣官房アイヌ総合政策室が提唱する「イランカラテ」キャンペーンがスタートした。そのシンボルとして札幌の玄関口にアイヌアートモニュメントを設置することになり、わたしはその調整役を担うことになった。

当初からある程度の姿は見えていた。メインの像は藤戸さんにお願ひし、周囲を東西北海道第一級の木彫作家たちの作品がとり囲むことにより、あらたなアイヌ文化復興の機運を「オーラ北海道」で醸成していこうというものである。しかし初めの構想では、六本のイクパスイ(捧酒箸)のセンターに立つのは、アイヌにとってもっとも身近で重要なカムイであるアペフチカムイ(火の女神)だった。わたし自身、藤戸さんがイメージされる火の女神ってどういうものだろうとワクワクしていた。けれども藤戸さんはキツパリとおっしゃった。「人物でいきたい」。その瞬間、わたしのなかに「ふくろう祭り ヤイタンキエカシ像」を初めて見たときの心の震えがフラッシュバックした。たしかにあの圧倒的な存在感を放つエカシこそ、歴史的モニュメントとしてふさわしい。こうして、中央には弓を掲げる威厳に満ちたエカシ、周りのイクパスイは、阿寒湖を中心とするメナスンクル(東の人)二名と、二風谷在住のスムンクル(西の人)四名に彫っていたことになった。イクパスイは本来トウキ

(杯)の上に置くものなので、直立させずに斜めに立てることにしたのは、七名全員が阿寒湖に結集した構想会議での藤戸さんの発案によるものだ。

愛される像へ
いちばんの課題だった資金調達についても、日ごろから札幌大学ウレシパクラブを支援してくださっているウレシパ・カンパニー(企業会員)や多くの一般の方々のご厚志により、めどがたつた。

二〇一四年二月、藤戸さんをはじめとする制作者の方々はもちろん、内閣官房アイヌ総合政策室長、北海道知事、札幌市長、企業のトップたちがずらりと居並ぶなか、北原次郎太さん(北海道大学)を祭司として、ウレシパクラブの学生たちによるカムイノミ(神への祈りの儀式)が執りおこなわれた。

今や、札幌駅での待ち合わせ場所としても定着したイランカラテ像。エカシの瞳は、北の大地の明日を見据えているのかもしれない。



「ウレシパモシリ北海道 イランカラテ像」(2015年)

大阪の都市景観の変遷を探る

うちだ よしち
内田 吉哉
民博 機関研究員



大阪市内を探検してみました

古い写真と現在の景観を比較する筆者。
場所は本町橋（大阪市中央区）

都市の景観は目まぐるしく変化する。古い建物がなくなったり、新しいビルが建てられたり、その変化に驚くことも多い。しかし今でも、古い資料を手がかりにしてみかしの名残を探り出すことは可能である。古写真を片手に、大阪の街を歩いてみた。



仕事に携わるようになってからである。母校で研究員として、昭和初期から中期にかけての大阪を撮影した写真資料の調査を担当することになり、そこで写真に映るかつての大阪の光景に目を奪われた。一九五〇〜一九六〇年代の大阪の写真では、近世に開削された堀川がまだ市内に残されており、たしかに「水の都」の景観が広がっていたのだ。

写真資料の調査を進めるなかで痛感したのは、交通量の増加と建築物の高層化が景観におよぼす影響の大きさである。交通量の増加が幹線道路の拡張と高速道路の建設を必要とし、そのために堀川が埋め立てられた。また、建築物の高層化による眺望の遮断が、都市のなかにある「名所」を変化させてしまった事例も多い。

こうした変化の多くは、一九六〇〜七〇年代のいわゆる高度経済成長期に起こった。高度経済成長期は、日本における都市景観の大変革期なのである。

街なかに残る「へんな場所」を探る

写真資料をもとに、実際に大阪の街なかを調査してみると、かつての堀川の名残と、新しく建設された高速道路が混在する光景を見ることができた。阪神高速道路の環状線や守口線の上をとおっている。高速道路沿いに歩くと、道の真中に突然橋の欄干だけが立っていたり、なかには橋そのものが平地にポツンと残り残されていたりする。完全に堀川の痕跡が残っていないようなケースで



雑喉場（ざごば）橋の記念碑だけが残されている場所も（大阪市西区江之子島）

みんなは、世界をまたにかけて活躍する人類学者が集まる研究施設だが、そのなかにあつてわたしの研究対象となるフィールドは、非常に「ごちんまり」している。

わたしが現在とり組んでいる研究テーマのひとつに、絵画や写真資料を活用した都市景観の変遷史研究がある。ところが、目下研究対象にしている地域が、国立民族学博物館の所在地たる「大阪」なのである。調査に出かけるといってもバスポートもビザも必要なく、地下鉄や私鉄でほんの数十分、あとは徒歩で用が足りてしまう。

それでは、わたしは大阪の街なかを歩いて何をしているのか。わたしは、古い写真や絵画を手掛かりにして、過去の大阪の痕跡を探ってまわっているのである。



堀川の跡に夫婦橋の欄干だけが残る（大阪市北区天神橋4丁目）

なぜか五〇年前の大変革期

わたしが大阪に住むようになったのは、大学に入学してからである。ときはすでに平成、バブル景気も弾け終わって都市の開発も一段落したころだった。大学では歴史学を学んでいたのだが、大阪の地域史に関する本を読んだり授業を聞いたりするたび、大阪が「水の都」と表現されることに違和感があった。田舎から出てきたわたしの目に映る大阪は、どこまでも現代的な大都会でしかなく、その印象を構成する景観は、主として高層建築と高速道路の高架、そして市内を縦横に走る地下鉄網だった。

その印象が一変したのは、大学院を修了して大阪の文化遺産研究の



〈上〉 明治時代の絵葉書「(大阪名勝) 高津神社ヨリ市街ヲ望ム」(大阪市立図書館デジタルアーカイブより)
〈下〉 現在の高津宮からの景観。建築物の高層化により視界は数十メートル (大阪市中央区高津)

も、橋があった地点に記念碑や解説板が設置されていることもある。

また、建築物の高層化がまねいた都市景観の変容のわかりやすい例として、高津宮からの眺望の変化がある。高津宮は、仁徳天皇が民家を見下ろし、炊飯の煙が少なくなることから民衆の窮乏を察したという伝承の残る場所である。高津宮のある地域は上町台地とよばれ、平坦な地形の大阪では唯一の高地であった。高津宮の海抜は約一三メートルにすぎないが、大阪駅付近で約〇・五メートル、海に近いUSJ付近では海抜〇メートル以下の場所もあることからすれば、いかに「高地」であるかが察せられよう。高津宮からの眺めは伝統のある大阪名所のひとつだったが、現在では高層建築に遮られている。

景観の変化を一例として、高度経済成長期は日本の文化史上、きわめて大きな画期であったのだが、この時代を歴史学の問題としてとらえた研究は少ない。競争相手のいない宝の山を見つけた気分、わたしは今日も大阪の街を探検している。

開館40周年記念特別展
「太陽の塔からみんなくへ」
70年万博収集資料展

1968年から1969年にかけて「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」が世界の諸民族の仮面、神像、生活用品を収集しました。収集活動にかかわる書簡や写真とあわせてコレクションの生い立ちを紹介します。これらの資料は、70年大阪万博で太陽の塔(テーマ館)の地下に展示され、現在、みんなくの貴重なコレクションとなっています。

会期 3月8日(木)～5月29日(火)
会場 特別展示館



假面(韓国)

開館40周年記念企画展
アイヌ工芸品展
「現れよ。森羅の生命」
木彫家 藤戸竹喜の世界
熊をはじめとする北の動物たちからアイヌ文化伝承者の等身大の彫像まで、藤戸竹喜(1934)の主な作品をおして、創作活動の軌跡とその背景をたどります。
会期 3月13日(火)まで
会場 本館企画展示場



「親子熊」2004年 藤戸竹喜蔵
撮影 露口啓二

講師 齋藤晃(本館 教授)
会場 本館展示場
※要事前申込、要展示観覧券(団体料金、定員30名)
主催 国立民族学博物館
一般社団法人ナレッジキャピタル
株式会社KMO
お問い合わせ先
企画課 博物館事業係
06・6878・8210

カレッジシアター
「地球探究紀行」
開館40周年にちなみ、本館展示の地域区分(12地域)ごとに、地球に暮らす人びとの多様な営みを紹介します。
※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費1000円、定員各回50名
主催 産経新聞社
共催 近鉄文化サロン、スペース9
特別協力 国立民族学博物館 千里文化財団

みんなく映画会・第39回ワールドシネマ「テレビジョン」
厳格なイスラームを遵守するバンクグラデシユの小さな村の騒動をおして、宗教と現代文明のあり方を考えます。
日時 2月10日(土)13時30分～16時30分 (13時開場)
みんなく映画会・公開セミナー「渡り鳥と人のかかわり」
「北東アジアから考える」
北東アジア地域の渡り鳥と人のかかわり方を、生き物の視点から、映画や討論会をおして紹介します。
日時 2月11日(日)13時～16時30分 (12時30分開場)

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。
シルクロードのオアシス都市
「ウスベキスタンの発掘調査から」
日時 2月28日(水)13時～14時30分
講師 寺村裕史(本館 助教)
会場 あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
お申し込み・お問い合わせ先
ウェーブ産経カレッジシアター係
06・6633・9087

連続講座
「みんなくナレッジキャピタル
「ワールドワークを語る」」
開館40周年を迎えたみんなくの展示を生み出すもとなつた、数多くのワールドワークについてお話しします。
第6回は、みんなく展示場で展示ツアーをおこないます。
民博展示ツアー「アマゾン」の聖人祭
「在来の伝統とキリスト教の融合」
日時 2月4日(日)13時30分～15時 (13時受付開始)

みんなく映画会・第40回ワールドシネマ「ライパンの闘い」
戦火のスリランカから逃れ、フランスで新しい生活を始めた「仮装一家」をおして、難民の状況について考えます。
日時 3月10日(土)13時30分～16時30分 (13時開場)
会場 本館講堂(定員450名)
※申込不要、要展示観覧券
※入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布

みんなくセミナー

日時 2月17日(土)13時30分～15時(13時開場)
会場 本館講堂
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)
第477回
ユネスコアワルドの系譜
「この世ならひんがしの出現にひびく音」
講師 山中聖子(本館 准教授)

「小豆洗い」、「天狗倒し」などのように、実態が見えない「異音」は怪異とみなされます。儀礼や芸能などにおいても、この世ならざるものが登場する際に音が重要な役割を果たします。伝承、文学作品、映像取材などをとおして、怪異の音の系譜を追ってみます。



雷神の姿で描かれた火車
『奇異雑談集』(国立民族学博物館蔵)より

みんなくウィークエンド・サロン
研究者(と)話(を)く

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

2月4日(日)14時30分～15時15分 本館ナビひろば
「優しいチヨコレットとはなにか?」
——倫理的な消費入門——
話者 鈴木紀(本館 准教授)
2月11日(日)14時30分～15時15分 本館ナビひろば
「神教と多神教——宗教学からみた世界の宗教」
話者 新免光比呂(本館 准教授)

刊行物紹介
■中牧弘允 編
『世界の暦文化事典』
丸善出版 12,000円(税別)
月刊みんなく2008年4月号から2012年3月号に連載された「歳時世相篇」がきっかけとなり誕生した本。世界各地の暦文化(記念日・お祭り)をその成り立ちから紹介し、イスラーム暦、ヒンドゥー暦、グレゴリオ暦など、数々の暦の共存を解き明かす。
中牧弘允 編
世界の暦文化事典
丸善出版

2月18日(日)14時30分～15時 本館ナビひろば
日本の文化の展示場「祭り」と芸能から
話者 笹原亮二(本館 教授)
2月25日(日)14時30分～15時30分
本館ナビひろば「企画展示場
木彫家 藤戸竹喜の世界」
話者 齋藤玲子(本館 准教授)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
みんなくミュージアムパートナーズ
開館40周年記念ワークショップ
「みんなであつたらいい! 帆付きアウトリガーカヌー」
自分だけの「アウトリガーカヌー」を作ろう! 本館オセアニア展示場に展示しているチエエヌ二号の、サタフル島から沖縄への大航海も紹介します。
日時 3月25日(日)①11時～②14時、
(各回1000名)
会場 本館エントランスホール
定員 各回6名(先着順)
対象 9歳以上
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

友の会

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpaktomo@senri-f.or.jp

友の会講演会(大阪)

会場 本館第5セミナー室 ※当日先着順
※会員無料(会員証提示)、一般500円
第475回 3月3日(土)13時30分～14時40分(定員80名)
「開館40周年記念企画展 アイヌ工芸品展」
「現れよ。森羅の生命」——木彫家 藤戸竹喜の世界——関連
講師 齋藤玲子(本館 准教授)
藤戸竹喜氏(1934)は、旭川を拠点に「熊彫り」を生業としていた父のもとで12歳から木彫を始め、30歳で道東の阿寒湖畔に民芸品店とアトリエを構えて独立。熊を原点としつつ、狼や鹿など北国の野生動物とアイヌ文化伝承者の姿を木に刻み、繊細さと大胆さが交差する独自の世界を築いてきました。これらの作品は、いつ、どのように生まれたのか、ご本人からうかがった幼少時や青年期の話などを交えて、紹介します。
※講演会終了後、企画展の見学会と映像鑑賞会を交代制でおこないます。(要友の会会員証、もしくは展示観覧券)
第476回 4月7日(土)13時30分～14時40分(定員96名)
「開館40周年記念特別展
「太陽の塔からみんなくへ」70年万博収集資料展」
文化遺産としての日本万国博覧会
「人類の進歩と調和を再考する」
講師 鈴木紀(本館 准教授)

1970年に開催された日本万国博覧会は、世界77カ国が参加し、183日間の会期中に6420万人が入場した昭和の国民的イベントでした。あれから約半世紀、当時のテーマ館の地下展示場を飾った民族資料が国立民族学博物館で再び展示される今春、あらためて万博とはなんだったのかを考えてみたいと思います。万博のテーマとして設定された「人類の進歩と調和」の意味を、太陽の塔と世界各地から集められた民族資料を手掛かりに考察します。
※講演会終了後、特別展の見学会をおこないます。(要友の会会員証、もしくは展示観覧券)

第77回体験セミナー
植物から博物学の世界を知る
——東京大学総合研究博物館見学——
2月24日(土) 申込締切【2月9日(金)】

想像界の生物相

ベニンの魚足王

民博 機関研究員 戸田 美佳子



資料名 | 飾り板

標本番号 | H0174737

制作地 | ナイジェリア (推定)

収集地 | ケニア

サイズ | 高さ 47 cm × 幅 37 cm × 厚さ 9 cm

ナマズのような両足をもつ人像。この人物は、装飾された腰帯を付けており、地位が高いのだろう。傍らには彼を両肩から支える二人の人物が描かれている(右頁)。この魚足人像のモチーフは、現在のナイジェリア南部に二世紀ごろに成立し、一九世紀末まで栄えたベニン王国で制作された装飾板や象牙の彫刻(下図)などに頻繁に用いられていた。

ベニン王国はポルトガルと一四八五年に初めて接触し、ヨーロッパとの交易をとおして発展した。一八九七年にイギリス軍に征服されるまで、サハラ以南アフリカでは稀にみる富、権力、そして軍事力をもつ世襲の王制が長期に渡って安定した王国を築いていた。

イギリスに戦利品として渡ったベニン美術の数々は、現在、その多くが大英博物館やベルリンの民族学博物館など欧米の博物館に展示や保管がされている。みんぱく所蔵の装飾板はケニアで購入されたものだが、魚足人像の図版をもとにナイジェリアで新しい時代に制作されたと考えられる。

かつてのベニン王宮では、柱が王宮の儀礼や戦いの様子をあらわした真鍮の装飾板で覆われていた。王宮の歴史を伝える

写実的な鑄造作品のなかで、奇態な魚足人像は異彩を放っている。

ダグラス・フレイザーは一九七二年の編著書のなかで、魚足人像は神や神格化された王(オバ)を描く際に用いられたと説明している。そして両足の魚は、西アフリカで広く信仰されている海(川)の神オロクンの象徴であるナマズをあらわしているという。

◆◆魚足王オーヘンの伝承◆◆

ベニン王国の魚足人像にはモデルとされる人物がいる。ベニン王国九代目のオバ、オーヘンである。オーヘン王はポルトガルとの接触以前の二四世紀ごろもしくは一五世紀初頭に在位したと推定されている。

伝承によると、オーヘン王は在位二五年のときに突如、両足が麻痺した。力の象徴であるはずの王が障害をもつという事態に、王のその後については相反するふたつの話が残された。王は慎重に隠していたが、あるとき、町の長が王より先に評議会へと入り、その事実を知ってしまう。そこで王は彼を処刑する。ここから話はふたつに分かれる。ひとつ目は、それらを知った民衆が王に反乱を起こし、王を投石で殺した、もしくは自殺に追い込んだ



ベニンの象牙彫刻とその拡大図(ベルリン民族学博物館所蔵)
© Foto: Ethnologisches Museum, Staatliche Museen zu Berlin
Fotograf: Dietrich Graf (CC BY-NC-SA 3.0 DE)

というもの。ふたつ目は、オーヘン王はオロクンが憑依したために足がナマズのようなになったと考えられた。その足は神聖な存在となり、それ以後、王はオロクン信仰の推進者として崇められたというものである。

ふたつ目の伝承は魚足人像のイメージと重なる。しかし、オロクン信仰から魚足人像が先に生まれ、そのイメージをもとにふたつ目の伝承が創られた可能性もある。イメージが先か、伝承が先か、どちらかはわからない。ただし、新しい時代になっても魚足王のモチーフが再生産され続けたという事実は、人びとが日常的な障害をめぐる葛藤を、代替可能な言説へと組み替えてきた創造的な営みでもあったのではないだろうか。

新世紀ミュージアム

中国の歴史と芸術をおしみなく紹介する国立の博物館。常設展示のなかに一カ所、アフリカ芸術を紹介するコーナーがある。なぜここにアフリカ芸術の展示があるのか。その理由には、世界の経済状況が関係しているようだ。

中国の首都北京に行った。天安門広場から北側の天安門を望むと、おなじみの毛沢東の肖像がかかっている。同じ位置から東側を望んだところに、中国国家博物館がある。

同じ地区にある故宫博物院や毛主席記念堂と並んで、この中国国家博物館も、北京観光の要所である。中国国民も海外旅行者も身分証明書を示せば無料で入れるが、来館者があまりに多いため、入場の手前のセキュリティチェックで延々と列をつくらなければならぬ。

殿堂と形容したくなる建物は、二〇一年にリニューアルしたもので、建物の総面積は二〇万平米近い。展示面積の割合は不明だが、仮に一割だとしても、みんぱくの本館展示の二倍以上におよぶ。展示場の数も四〇以上にのぼるといふ。世界有数のマンモス級博物館といつてよい。

重なって見える。

現代アフリカを民族誌的に描き出すことよりも、これまでの文化史におけるアフリカのインスピレーションの役割を知らしめることが役割なのだろう。その証拠に、展示されたものの素材はことごとく耐久性の高い木材や金属で、植物繊維や化学繊維でできた布やバスケットなど、もっとも身近な生活用品



美術展示あるいは民族誌展示「アフリカ彫刻芸術傑作展」

は展示されていない。それにもかかわらず、みんぱく同様に露出展示の手法を採用していて、アクリル・ケースなどの覆いが来館者とのあいだにないため、古美術店にありがちなおどろおどろしさが直接的に伝わってくる。要約すれば、中国国家博物館のアフリカ展示は、広大な建物のなかにあって異質な雰囲気放っている。とはいえ、その展示の重要性は、中国の人たちにとって決して小さくないと思う。その価値はおそらく、まったく数の来館者にアフリカの一面を開陳して見せたことにある。アフリカ展示室は、出入口がエスカレーターを降りたところのすぐ近くに位置することもあり、他の展示室に勝るとも劣らない数の人たちを招きいれている。北京に展示されたアフリカは、ヨーロッパ人が好んだプリミティビズムを強く反映しているように思えるが、その視野に収まりきらないアフリカの現実がやがて中国の人たちをたらえていくと期待したい。

なかに入ると、アヘン戦争の屈辱から現代の栄光にいたる現代史展示、中国の宇宙開発に関する科学展示、そして彫刻や青銅器、陶器、古銭といった各種のアンティーク展示などが常設されている。科学展示やアンティーク展示は日本の科学博物館や美術館の雰囲気によく似ているが、現代史展示は独特の文言や音響効果で情緒を喚起するしつらえになっており、日本の博物館展示にはあまり類例がない。日本が侵略者側に立っていることを残念に思う人もいるだろうが、博物館好きなら訪れてみる価値があるように思う。

アフリカのインスピレーション

どっぶり中国文化に浸れるこの場所に、じつは一カ所だけ、常設の異文化展示(民族誌展示)がある。それが「アフリカ彫刻芸術傑作展」である。謝燕申氏が寄贈したアフリカン・アートの



中国国家博物館の前で入場を待つ人々



現代史展示「復興の路」(掲載写真はすべて2017年に撮影)

コレクションから五〇〇点あまりが選別され、仕切りのない大部屋に展示されている。ほとんどが木製あるいは金属製の彫像で、民族誌的な説明はほとんどない。等身大サイズのものも多く、来館者の群れとは異質な生きまものが部屋で肩を寄せあっているようにも見える。その怪しげな雰囲気は、現代中国人が見出したアフリカというよりも、二〇世紀フランスのキュビストやシュルレアリストたちが愛したアフリカに

芸術から見る世界経済

わたしがこのように思うのは、今やアフリカのどの国へ行っても、中国の人たちが旺盛にビジネス活動を展開しているからだ。二〇世紀初頭から、アフリカに渡った中国人の数はけっして少なくなかったものの、二一世紀の大規模移住は桁外れである。二一世紀の一〇年あまりのあいだに、主要な都市の一角は、あつという間に漢字で溢れるようになった。北京のアフリカ展示は、グローバルな社会経済情勢を語るもうひとつの現場であるように思う。

「手芸」誕生——バン格拉デシユの刺繍布カンタから

五十嵐 理奈 いがらし りな 福岡アジア美術館学芸員



1909年に娘の結婚祝いとして製作された敷物カンタ
(所蔵：Jahanara Abedin、写真提供：福岡アジア美術館)

一見、時代を問わない普遍的な手仕事であるかのように感じられる「手芸」。しかしそれは日本だけではなく、バン格拉デシユでも意外と新しい手仕事のあり方なのだ。国づくりや経済状況とかがわかってあらたに誕生したバン格拉デシユの「手芸」を追う。

概ね共通認識される「手芸」という日本語だが、バン格拉デシユで話されるベンガル語にはピタリと当てはまる語がない。類する語としては、手仕事全般を指すハテール・カージ、手工芸を意味するホスト・シルボ、そしてインドと同様に開発援助行政のなかで使われる英語のハンディクラフトなどがある。では、「手芸」に当たる語はなくとも、「手芸」的な造形活動はあるのだろうか。ここでは、バン格拉デシユの女性が農閑期に家庭内で作ってきた手仕事の刺繍布カンタを例に、「手芸」とよべる領域があるのか探ってみよう。

刺し子の刺繍布カンタ

カンタとは、バン格拉デシユとインド西

ベンガル州にまたがるベンガル地方で作られてきた刺し子の布である。着古して柔らかくなったサリーやドーティー、ルンギなどの腰巻布を四、五枚重ね、全面に並縫いを施して布を丈夫にし、掛け布団や敷布などに作り変えた日用品である。あらゆる宗教、階層、年齢のベンガル女性が手がけ、その家族や親戚が私的に使うもので、売買されることはなかった。なかには数年がかりで多様なステッチを駆使して色鮮やかな文様を刺繍した装飾的なカンタもあり、それらは嫁入り道具として、また結婚式や宗教儀礼など特別な日に用いるものであった。しかし、これを「手芸」とはよび難い。この布が個人的な趣味や生活のゆとりから作られたものではなく、地域社会に存在す

バン格拉デシユに「手芸」を探す

近代日本で形成された概念である「手芸」は、明治以後の日本社会の変化に合わせてその内実を変化させてきた。しかし、「手芸」をバン格拉デシユに探そうとすると、良き家庭婦人が趣味としてたしなむ手芸も、現代日本のライフスタイルを反映したお手軽でかわいい手芸も一見みあたらない。「女性たちの家庭における趣味」として

る必然性と役割をもつためである。女性たちは布をリサイクルして自分たちの手で布団を作らねば暮らせなかったし、また、良いカンタを作る母親の娘は理想的な嫁になるという嫁選びの指標としても機能していたため、母親と娘、娘と嫁ぎ先の家族とを結ぶ社会的な役割も果たしていた。この地域社会に生きるうえで、カンタを作らないという個人的な志向による選択肢は、二〇世紀中ごろまではほぼなかったといえよう。こうした状況が一変するのは、カンタが商品化された一九八〇年代のことである。

カンタの商品化

一九七一年のバン格拉デシユ独立後、カンタはバングラデシユを代表するハンディクラフトとして、経済的価値をもつ商品へと変貌した。それはイギリスとパキスタンからの二度の独立という政治状況と、



商品カンタを製作する女性(1999年)

戦後の経済的な困窮状況を反映して起きたことだった。一九六〇年代、パキスタンからの独立運動が盛んになるなか、文化人や美術家は、ベンガル農村の手仕事カンタこそが新生バン格拉デシユの文化的・政治的独自性を象徴する「民俗芸術(ロク・シルボ)」であると価値付けた。イギリスからの独立の混乱のなかで失われ、忘れかけられていたカンタがにわかに脚光を浴びるようになったのである。その後、一九八〇年代になると、今度は国内の女性活動家や国内外のNGOが、パキスタンからの独立戦争で夫を亡くし生活手段を失った女性たちの生活再建をめざし、刺繍技術を応用してカンタの商品化に着手した。開発援助行政と連動したハンディクラフト生産プロジェクトは、カンタを現金収入を生む、経済的な価値をもつ布へと変化させたのである。

ハンディクラフトと「手芸」の誕生

刺繍する行為が現金を生むようになると、女性たちは、これまでのように家族のために装飾的なカンタを作らなくなった。カンタが果たしていた社会的役割は、ハンディクラフトを作っていた現金で、布団を手に入れ、娘の嫁入り道具を買い揃え、娘にも教育を与えて良き嫁に育てることで代替さ



NGOのハンディクラフト・センターで学んだステッチと糸で作った家庭用の「手芸」的な枕カバー(1999年)

れたのである。そして、現金収入をえるためのカンタ製作が定着してきたころ、今度は女性たちのなかに、家庭用のテーブル敷きにワンプイント刺繍をしたり、

商品カンタを作るためのトレーニングで習った新しいステッチを使って、枕カバーを作ったりする人があらわれてきた。それはかつて嫁ぐ娘のために何年もかけて縫い上げた刺繍布ではない。暮らしに彩りを加えるちょっとした工夫、家事の間に生み出された刺繍布である。これこそが「手芸」的な造形活動ではないだろうか。

バン格拉デシユにおける「手芸」とは、商品化という資本主義制度の導入によって、手仕事が民俗芸術的価値付与を背景に商品となったハンディクラフトと、家庭で趣味的に楽しむ「手芸」とのふたつに分化し、同時期に誕生したものである。

ひり出せ糞！



What's in a name?

ほし いずみ 東京外国語大学
星 泉 アジア・アフリカ言語文化研究所教授

チベットの牧畜民はヤク（高地に適應した毛の長い牛）や羊、ヤギ、馬などの家畜とともに暮らしている。そんな彼らにとって、家畜の糞はとても身近な存在だ。ヤク糞はフチャ、羊とヤギの糞はリマ、馬糞はフトウルと名前もよびわけられる。身の回りのものを何でも上手に使いこなす彼らは、糞もそのまま放つてはおかない。量も多く、成形しやういフチャが一番使い度がある。乾かして燃料にするのが一般的だが、積み上げて風よけの壁にもする。一度凍らせると硬くなる性質を利用して、昔は調理台やら高坏たかづき、テーブル、雪遊び用のそり、子どもが乗って遊ぶ木馬ならぬ糞馬など、いろいろなものを作ったという。フチャを箱型に成形して凍らせたなら、肉を貯蔵するのに使う天然の冷蔵庫のできあがりだ。羊やヤギのコロコロした糞は乾かして燃料に。馬糞は燃料にはしないが建物を作るときに土に混ぜ込んだりする。なかでもヤクの糞は特別で、たくさんの名前がある。フチャは未加工の糞の総称に過ぎない。例えば、夏の芝草をよく食べた時期の糞はンゴフチ、土や枯れ草を舐めるしかない冬の時期の糞はナクルクという。また、〇歳の赤ちゃんヤク（ウイル）の糞の総称はウイルフチというが、さらに細かくいうと生まれたての仔ヤクの糞はツエンブ、初乳を飲んだ直後の仔ヤクの糞はフティフトウク、初乳は終えたがまだ草を食べていない仔ヤクの糞はオフトウクとに分ける。水分の多寡など糞の状態による呼び名もある。排泄はいせつしたばかりの湿り気が多い糞、水分を多く

含む糞、凍った糞などと枚挙にいとまがない。彼らがヤクの健康状態や成長過程にいかによく気を配り、また加工対象としていかに細かく観察しているかがよくわかる。

燃料用に加工した糞はオンフという別の名でよばれる。かまどにくべる糞を「フチャ」とよぼうものなら大爆笑だ。オンフは総称で、成形の仕方によつてよび分ける。集めたフチャを手でつかみ、両の手首をぶらぶらさせながら地面に落としていき、均等な大きさにし、よく乾かしたものがツアブルク。ほかに、小さめに丸めたタンルク、地面に薄く伸ばすタイプのコホクといった具合である。塊状のものは乾燥に数日かかるが、コホクはすぐに乾くので、テントを引っ越したばかりのときなどに重宝するという。ちなみにオンフはほんのりと草の香りがする程度で、燃やしてもちっとも臭くない。

糞加工は重労働だが女性が担当する。もつともたくさんオンフを作る時期は氷点下一〇度以下にもなる冬だというから驚きだ。草の多い夏は乳もよく出るので、女性たちは乳しぼりと乳製品作りに忙殺され、糞加工に割く時間があまりないのだ。冬の糞加工はひどくきついはずだが、そんなとき彼女たちの苦勞を和らげているのが「出掛けの糞（ジヨフチ）。ヤクたちが朝、山に放たれる前にぶりぶりとひり出していくほかほかのあれだ。温かい糞は手にやさしい。働く女性たちの実感のこもった名前だ。

編集後記

本特集を編集しているときに、藤戸氏の作品はアメリカの Smithsonian 協会国立自然史博物館でも展示されたと知った。そのとき頭をよぎったのは、ここ数年ある人物の生涯に関する資料を探るなかでたまさか出会ったアメリカの彫刻家ジェイムズ・クラークと彼の彫像である。クラークは動物の彫像で一家をなしていた。同時に剥製師としても知られ、剥製の師カール・アケリーの没後はその跡を受けて、生きた動物が動き出さんばかりの姿をした剥製をジオラマ展示する技術で、当時の自然史博物館に多大なる影響を与えたという。もとより小生が Smithsonian、動物の彫刻という連想で結び付けただけで、両者のあいだに具体的なつながりはない。企画展では、藤戸氏が自然をどう造形しているのか、本欄執筆中は開催準備中であるため、開催後はそれぞれ隔々まで見ることを楽しみにしている。(丹羽典生)

●表紙：藤戸竹喜「親子熊」（2004年、作家蔵） 撮影：露口啓二

次号の予告

特集

「万博資料収集団」（仮）

みんぱくをもっと楽しみたい 人のために—会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいあります。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

月刊みんぱく 2018年2月号

第42巻第2号通巻第485号 2018年2月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 丹羽典生（編集長） 寺村裕史 三島禎子
南真木人 山中由里子 吉岡乾

デザイン 宮谷一欒 長岡綾子

制作・協力 一般財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅（エキスポシティ前）」「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

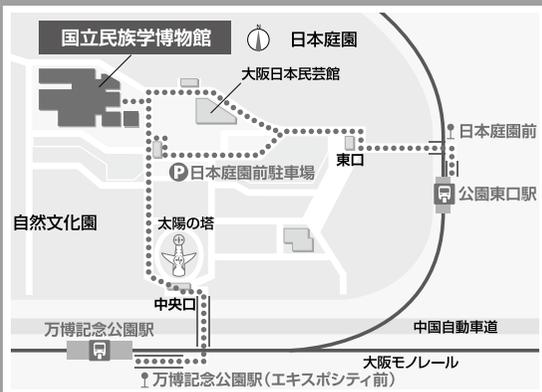
<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>



みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

“みんなぱく”ってどんなところ？

「みんなぱくバーチャルミュージアム」を公開しました

博物館機能をもった民族学の研究所、国立民族学博物館（みんなぱく）。その広い展示場では研究成果の一部を公開しています。民族学の展示とはどのようなものか、疑問に感じる方がいらっしゃるかもしれません。そこで役立つのが2017年12月に本館ホームページにて公開した「みんなぱくバーチャルミュージアム」です。2017年3月に全面改修を終えた本館展示場をパノラマムービーでくまなく撮影したもので、パソコンのモニター上で各展示場の様子をさまざまな角度から見ることのできる映像システムです。

「みんなぱくバーチャルミュージアム」にアクセスする

と、まずは展示場の入口、インフォメーション・ゾーンが映ります。床に表示される矢印をクリックすることで展示場内を進むことができます。さらに、バーチャル展示場では随所で電子ガイド（音声ガイド）も視聴可能です。現在は257点のコンテンツを公開しています。

みんなぱくに興味をもたれた方、校外学習先を検討されている学校の先生方はぜひ「みんなぱくバーチャルミュージアム」をお試しください。多様な文化のあり方に心惹かれることでしょう。美しい色彩とおもしろい造形、迫力のある実物を見に、ぜひ本館へお越しください。

「みんなぱくバーチャルミュージアム」 <http://www.minpaku.ac.jp/museum/showcase/movie>



床に表示される矢印をクリックすることで展示場内を進むことができます。また、見たい方角へ視点を動かしたり、より近くから見たい資料にズームインするボタンもあります。画面左上に表示される地図上の展示場名やポイントをクリックすると、その場所へ移動することもできます。